

? 中東 19 イラン イスラームの規範のなかで

| | |
|----------|--|
| 著者 | 鈴木 均 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| シリーズタイトル | アジアを見る眼 |
| シリーズ番号 | 90 |
| 雑誌名 | 「あそび」と「くらし」 : 第三世界の娯楽産業 |
| ページ | 137-141 |
| 発行年 | 1994 |
| 出版者 | アジア経済研究所 |
| URL | http://hdl.handle.net/2344/00017794 |

19
イラン

イスラームの規範のなかで

鈴木 均

イランに長期間滞在した大抵の日本人が抱く感慨のひとつに「イランは娯楽の少ない国だ」というのがある。これは確かに一面の真実であるだろう。その理由として第一に日本のように近代産業が日常生活の隅々にまで浸透している世界から見れば娯楽の少なさは第三世界共通の特徴といえる。第二に現在イランではイスラームという日常生活に対して非常に規範性の強い宗教が政治的な権力を握っており、社会規範が政治的な強制を伴っている。それ故、イランにおいて「娯楽」は成立しているが、「娯楽産業」は特定の分野を除いて近代産業として発達しているということはいえない。

だがイランにおいても多少とも国民的な規模で享受されている娯楽はいくつか存在する。イランにおいても近代的な大衆文化は徐々に形成されつつあるのである。ただその特徴として、

そのような娯楽の種類は、ちようどかつての日本と同様、マスメディアの提供する狭い分野に限られている。

映画、テレビ、サッカー

イランで国民的な規模で享受されている娯楽としてまず思い浮かぶのは映画、テレビ、サッカーである。

映画はイランで最も気軽に楽しめる娯楽として現在でも全国的に人気が高い。料金も安く（日本円で一〇円以内）、家族連れでも友達同士でも気楽に連れ立って行くことができる。手許の『イラン映画事典』（モスタファー・ザマーニーニャー編、一九八四年刊）によれば、イランで最初に映画が制作されたのは一九二九／三〇年のことであり、また『イラン統計年鑑』によると一九九〇／九一年現在でイラン映画だけで年間六四〇〇万人の観客を動員している。テヘランでは映画関係の雑誌も複数発行されており、また映画祭などの催し物も毎年開催されている。イラン映画に対する国際的な評価も最近とみに高まっているが、それを底辺で支えているのは映画に熱心な興味を示す若い世代の存在である。

テレビは現在イランの大都市のみならず農村部にまで浸透しているメディアである。テレビが最初に放送されたのが一九五八年、その後七八年にはカラー放送も開始され、シャヤーの近代化の象徴的な存在であった。現在二チャンネルで放送を行っているが、日本のように一日中番組があるわけではない。国産の子供番組なども好評を博しているが、最近ではNHK制作の

「おしん」がイラン・イラク戦争の末期から放送され、イランのマスメディア史上特筆されるべき大ブームを呼んだことは記憶に新しい。

最後にサッカーは、ボール一つあれば簡単なルールで誰でも参加できることもあり、第三世界の多くの国と同様、イランでも最も人気の高いスポーツのひとつである。そのボールはイランの何処に行つても売っている。ピニール製で、蹴りやすいように空気を余り入れていない。休日ともなれば、地面にラインを引いてゴールの目印になるものを置いただけの簡単なサッカー場で大人も子供も一緒になってボールを追っている光景を目にすることができ、テヘランなどにはいくつもサッカーのチームがあつて、主要なスタジアムで頻繁に対抗試合が行われている。また四年に一度のサッカーのワールドカップもテレビで放送され、大変な人気である。

イランの祭と娯楽

冒頭に挙げた日本人の代表的な感想と裏腹に、「イラン人は遊ぶことが好きか」という質問に対しては、イランに滞在した日本人の大部分が首肯するに違いない。多くのイラン人にとって結婚式や誕生日の機会にパーティーを開いて知人を招き合い、付き合いを深めることは、最高の娯楽のひとつであろうし、それ以外にも身内だけのパーティーはしょっちゅう開かれている。そのような場はまた若い男女が知り合う数少ないチャンスでもある。

だがこのようなパーティーも、テヘランの上流階級を別にすればそうしよっちゅう開かれる

わけでもない。イランの正月であるノウルーズ（西暦では三月二十一日に当たる）は、イラン中の人々が身内を招き招かれ合う年に一度の機会である。この日に先立つ年末最後の水曜日（チャハールシャンベ・スーリー）の前夜には火祭りが行われ、またノウルーズには金魚鉢、鏡、蠟燭、ハフトスフィン（七つのS）、大麦の若芽、卵、コーラン、貨幣、ミックスナッツ、菓子などを並べて知人同士訪問し合う。新年第十三日はスイーズダ・ベダルと呼ばれ、その日に必ず一度は外出しなくてはならないとされている。多くの家がこの日にはピクニックに出かける。またノウルーズの大麦の若芽もこの日に小川などに流される。（浜畑祐子「ノウルーズ」『オリエント』第三十一巻第一号所収）を参照）

イランにおいて別の意味で重要なもう一つの祭が、タースウアー、アーシユラーの服喪行進を中心とする一連の行事である。第三代エマーム・ホセインの壮絶な戦死を頂点とするカルバラーの悲劇を毎年追体験し、それによって自己のアイデンティティーを確認しようとするこの祭は、地域的な結束の重要な契機であると同時に、若者のカタストロフィーの発散のための数少ない場所である。

イランにおける

娯楽の多様性

イランの娯楽といっても社会階層、居住地域、世代、性差等によってさまざまであることはいうまでもない。さらに地方といってもイラン全国一様ではなく、それぞれの地方や民族によるバラエティーはきわめて豊かであ

る。例えばセイエド・アリー・ミールニヤー編の『民俗事典』の第六部では二七の地方的な子供の遊びが紹介されているが、これがごく一部の例にすぎないことは本文でも述べられているとおりでである。

また子供の遊びばかりでなく前述のノウルーズやタースウアー、アーシューラーの服喪行進、結婚式などの行事にも地方色の豊かなものがあり、その点でも興味は尽きない。

外出する機会の少ないイランの女性にとってはズィヤーラト（イラン全国にある聖者廟への参拜）も娯楽のひとつとして位置づけられる。

また買い物も重要な娯楽のひとつである。買い物は単なる経済行為ではなく、同時に人との付き合いや情報交換、さらに見せ物などのより直接的な娯楽の側面をももっている。

*

だがいずれにしてもイランでは娯楽は金を払って提供されるものではなく、自ら動いて見つけだすべきもののようなものである。そしてイラン人にとって最大の娯楽は、人と付き合い会話を楽しむことだろう。じっくり時間をかけて、お茶と果物を楽しみながら友と語り合う。現代の日本人にとって最も苦手なのがこの種の娯楽なのではないだろうか。

（すずき ひとし／アジア経済研究所地域研究部）